

第19講

論説・評論(5)——内容合致・主張把握

要點整理

特定の箇所(傍線部)に関する設問とは異なり、文章全体の内容や筆者の主張を、適否判別という形式で問う設問。全体を大きく把握したり、ポイントとなる箇所をおさえたりする総合的な読解力が試される。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

- ・ 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
- ・ 筆者は、……についてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

- ① 本文全体を視野に入れて、論旨の展開を大きくつかむ。段落の初めや終わりの部分に要点がまとめられている場合が多いので、それらの部分を中心に各段落の要点をおさえる。要点となる箇所にはキーワードが使われていることが多い。
 - ② 本文の終わりの部分には、全体の結論や筆者の主張が述べられていることが非常に多い。この種の設問に対しては必ずこの部分に着目して、その内容を把握する。
 - ③ 選択肢は他の設問に比べて比較的長めである。そのためやや難しいという印象を受けるが、一字一句丁寧にその適否を判断すればよい。その基準はあくまでも本文にあるから、該当箇所を本文に求め、一致不一致を検討する。
- 内容合致問題・主張把握問題では、本文全体を正確に把握しているかどうか問われる。配点も他の設問に比べやや高いことから、選択肢の吟味は慎重かつ論理的でなければならない。「本文にこうあるから合致する(合致しない)」という実証的な態度で臨むことが必要である。

演習問題 A

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

① **数学者と文学者**の、生活の違いや苦悩の異なりについては、身近に好い観察材料があったからある程度予想が出来る。しかし、数学と文学が仕事として極く自然に両立し得る、と安易に考えていたのは少々楽観的過ぎたようだ。共に芸術の一部門として、美と調和を追求するとは言え、その方法が極端に異なるのである。「**一言で言えば**、数学における方法は、数学的感覚に基づいた論理であり、文学では文学的感性に支えられた表現技術である。**だから私は**、

解説

読解のポイント

- (1) 五つの選択肢から一つを選ばせる形式が主流だが、六つから二つを選ばせる場合や、合致しないものを選ばせる場合もあるので注意が必要である。
- (2) 基本的に長めの選択肢の多いセンタ試験の中でも、内容合致問題・主張把握問題の選択肢はかなり長いものになっていることが多い。このような選択肢に対しては、読点に着目し、要素に分解してあたる手法も有効になる。
- (3) 選択肢が合致しない主な理由には次のようなものがある。
 - 本文の内容と矛盾する
 - 本文に同内容の箇所がない
 - 不適切な語句が含まれている
 - 本文中の語句を用いていても、本文とは異なる文脈で用いている
- (4) 合致しない選択肢は、部分的に合致しないものがほとんどである。合致する部分と合致しない部分を的確に見極める必要がある。

重要語句

◇新田次郎＝昭和期に活躍した小説家、気象学者。山岳小説を多数著した他、

7 数学に打ちこんだ後では数日間は文学をすることが出来ない。一向に仕事はかたらないし、筆をとることが苦痛に
さえ感じられる。

2 ② また逆の場合も同様である。すなわち、数学と文学を結ぶ橋を渡るのに数日間を要するのである。従ってそんな時は、
机に向かつてはいても頭は空転するばかりで仕事は進まず、橋の上を行ったり来たりしながら悩んだり焦ったりして
いる。これは大変な無駄であり、このノロマぶりでは仕事の両立さえ危うい。この非能率の原因を、機敏に方法転換
を出来ない私の無器用さに帰着させてしまえばそれまでだが、最近、それだけでは説明し切れないように思えてきた。
両者の間に介在する、より本質的な差異が原因となっているらしいのだ。

8 ③ ある意味で文学の本質は、それが小説であれ詩歌であれ、「人生が有限である」ことに在るのではないだろうか。
人間には、死というものが一定時間の後に必ずやって来る。死がなければこの世の中からほとんど全ての悲哀、苦悩、
孤独が一掃される筈である。不滅の生命が保証されているという事は、常に永遠の未来と可能性を約束されている事
だから失恋も失敗も失意もなくなるだろう。喜びとか幸せはこれらの裏返しに過ぎないからものは鋭く感受されるこ
とはあるまい。そして人を愛す必要もなくなるだろう。すなわち、文学の中心テーマである人間の情緒が、極めて
微弱にしか存在しないということになる。従って文学はその存在基盤を失い、また存在意義をも失うに違いない。こ
のように、文学は死と深い関わりを有している。別の角度から言えば、作家が創作をする時、「人生が有限である」と
いう宿命観念を、極めて間接的な形であるにせよ、心底では強く意識しているのではないだろうか。日本の代表的古
典である源氏物語、徒然草、奥の細道などを貫く無常は、まさに有限な人生を正面から見つめたものである。現代
文学でも、注意深く読んでみると、作家の眼が至る所で有限な人生を意識していることに気付く。ほんのさりげな
い描写の中に、作家のそんな感性が光っているのである。例えば父の『武田信玄』の中に、武田の軍勢が碓氷峠を越
えて関東に進軍してくる場面がある。初めて見る広大な関東平野で、大きな石のごろごろしている甲信しか知らない
兵卒が、
「この辺には石がない」
と思わず声を上げる。ある人が、この部分を評して、
「作者の科学者としての目がよく行き届いている」
と述べていた。私は、この評論家の目のつけ所のよさに感心したが、同時にいくばくかの落胆を禁じ得なかった。
私にはそれが、単なる関東平野と甲府盆地との地質比較、とは思えないからである。この兵は、初めて見る関東ロー
ム層への驚きを越えて、明らかに郷愁の念に駆られている。故郷の石を連想し、ついで故郷の山、川、谷、みなぎる
光、そよぐ風にまで想いを馳せ、更には残してきた妻子父母をも想っている。今日も人殺しの遠征を続ける自分、明
日の命さえ知れぬ自分を、故郷の悠久なる山河と対比させ、人生の寂寥を感じている。それはまさに作者の思いで
あり、有限な人生へのつきせぬ感受性である。広大な異国の枯野原を、隊伍を組んで行進する兵と軍馬の群。こ
の勇壮なる姿の中に、寂寥、憂愁をこっそり忍び込ませるのが、作家としての父の真骨頂なのである。いつぞや私が、
この解釈を父に問うたところ、口少なに、しかし嬉しそうに微笑んだのを覚えている。読者に感動を与える文学には、

35 35 30 20 15 10

長く気象観測の仕事に従事した。本文
中の「科学者としての目」はそのこと
をふまえたものである。なお、筆者は
新田の次男で、世界的な数学者である。

◇ はかどる ① 仕事が順調に仕上がって
いく。物事がうまく進む。

◇ 空転 ① からまわり。

◇ 機敏 ① 時に応じて心の働きや動作がす
ばやいこと。

◇ 帰着 ① よそからある所に帰り着くこ
と。② 議論などが結局ある点に落ち着
くこと。

◇ 介在 ① 両者の間に他の事物がはさま
つてあること。

◇ 悲哀 ① 悲しく哀れな気持ち。

◇ 情緒 ① 喜怒哀楽などの心の動きを誘
い起こすような気分。② 身体的表出を
伴うような、一時的で急激な感情の動
き。

◇ 宿命 ① 前世から定まっている運命。

◇ 進軍 ① 軍をすすめること。軍隊が進む
こと。

◇ いくばく ① いくらぐらい。どれほど。
少しばかり。漢字で書けば「幾許」。

◇ 落胆 ① 氣力を落としてがっかりするこ
と。

◇ 関東ローム層 ① 関東平野に降り積もつ
た火山灰等の堆積土の層。

◇ 郷愁 ① 異郷の寂しさから故郷に寄せ
る思い。ノスタルジア。

◇ 悠久 ① 久しい過去に始まって、変わら

必ず作家のこの感性が、ある時は明瞭な形で、ある時は極めて暗示的にだが、横溢（おういつ）していると言えよう。この感性こそが、人の深奥にある琴線（ことづな）を、最も強く揺さぶるのである。

④ 数学者も文学者も、「永遠なるもの」を希求（きこう）していることに違いはない。ただ文学者が、「永遠なるもの」を混沌（こんとん）たる人生の内に見出そうとするのに対し、数学者はその外に見出そうとしている。だから数学者が外なる宇宙に透徹した眼を向ける時、内なる混沌は、澄んだ眼を曇らせるばかりである。実際、数学者が新しい理論を構成したり定理の証明をしながら、有限な人生に起因するところの諸々の「X」を意識することは絶対にない。むしろ、「無限」を意識下では仮想していると言えるかも知れない。少なくとも、時間を超越した境地に在ることは確かである。数学において、深遠なる真理に到達するには極度の精神集中を必要とするから、人間、時間、空間などほとんど全てのものから完全に解放された状態にいなければならないのである。しかもその状態を持続させなければならない。それは大変に辛い試練であり、まさに生命の燃焼と言える。そうしないと真理の方が決して動いてくれない。

⑤ こう考えてくると、数学と文学にかかる橋を渡り切るのに時間がかかる理由が理解されよう。「Y」という言わば技術的なことに止まらず、精神構造のかなり深い部分での質変換まで行わねばならないからである。私はまだ、この困難を手際よく処理する方法を見出していない。数学から文学へ移る場合に多少効果のある方法は音楽を聞くことである。音楽と言ってもバッハとかモーツァルトでは駄目で、都はるみとか私の生まれる前に流行した戦前の歌謡曲の方がなぜか効き目がある。何か即効薬があれば有難いのだが、一方ではそんなものは存在して欲しくないという気持ちもある。

⑥ ともあれ、音楽その他の助けを借りてとは言え、たったの数日間で無限と有限の間を往き来することの出来る私は、ノロマどころか忍者の如き素早さを備えていると言えよう。もともと、橋を渡り切った積りでいるのは自分だけで、実際は、橋の上でいつまでも右往左往しているに過ぎないのかも知れない。（藤原正彦『数学者の言葉では』による）

（注）『武田信玄』：新田次郎の歴史小説『武田信玄』「風の巻」～「山の巻」（一九六五・一九七三）。

問一——線a「孤独」・——線b「無常」の本文における意味と反対の意味を持つ語句として、最も適当なものを次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- a「孤独」
ア 依存 イ 歓喜 ウ 友情 エ 希望 オ 連帯
b「無常」
ア 有情 イ 博愛 ウ 常住 エ 習慣 オ 安心

ず続くこと。

◇寂寥（しやくりやう）もの寂しい様子・感じ。

◇つきせぬ（つきせぬ）尽きない。無尽蔵の。

◇隊伍（たいぎ）隊を組んできちんと並んだ、その組・列。

◇憂愁（ゆうしゅう）悩み悲しむこと。うれしい。

◇横溢（おういつ）あふれるほど盛んなこと。

◇希求（きこう）得たいと願って求めること。

◇混沌（こんとん）物事が入り混じって、見分けのつかないさま。

◇透徹（とうてつ）①透き通ること。澄んで濁りがないこと。②筋が通っていて隅々まではっきりしていること。

◇意識下（いしぎか）①意識していること。②無意識であること。

◇仮想（かりさう）仮にそう考えること。

◇超越（てうえつ）①普通の程度を、遥かに超えること。②そのことを気にしないこと。

◇考え方や態度が、別のより高い次元にあること。

◇バッハ・モーツァルト（ばっは・もつた）いずれもクラシック音楽を代表する大作曲家。

◇都はるみ（みやこはるみ）昭和期から現在にかけて活躍する演歌歌手。大衆音楽の代表として挙げられている。

◇右往左往（みぎむぎむぎ）あっちへ行ったりこっちへ来たりして、うろたえ混乱すること。

問題

△反対の意味の言葉を選ぶ設問。本文中における意味を正しく捉え、それとは反対の意味の言葉を選ぶ。

問二 ———線c「真骨頂」・——線d「琴線」の本文中の意味として最も適當なものを次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

c「真骨頂」ア 特にすぐれている性情 イ 隠されているそのものの真実の姿

ウ これ以上はない、最高の地点 **工** そのものの本来の価値を発揮した姿

オ うそや飾りのない、本当のことから

d「琴線」

ア 外界の事物が与える印象を感じる心の能力 イ 心の中の、物事に共鳴し感動する部分

ウ 物事に触れた時に起こる微妙で繊細な感情 **工** 激しい感情が沸き起こる心の中のある部分

オ 美しい物事を敏感に感じ取る心の能力

問三 ———線①「逆の場合も同様」とあるが、「何と何」が「どのような意味」で同様だと言うのか。最も適當なものを次の各群のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 文学と数学を結びつけることと、数学と文学を結びつけること

イ 論理的な方法をとることと、感性を働かせること

ウ 数学の仕事から文学の仕事に移行することと、文学の仕事から数学の仕事に移行すること

エ 数学の仕事に時間がかかることと、文学の仕事に時間がかかること

オ 文学の仕事をする事と、数学の仕事をする事

どのような意味 ア 仕事を仕上げるのに数日間かかってしまうという意味

イ 二つの仕事を両立することができないという意味

ウ 同じ悩みを改めて感じさせられるという意味

エ 円滑な切り替えが難しいという意味

オ 美と調和を追求するのが目的であるという意味

問四 ———線②「文学の本質は、それが小説であれ詩歌であれ、『人生が有限である』ことに在る」とあるが、そのように筆者が考える理由として最も適當なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 文学は、人間がいずれ死ぬからこそ生じる出来事や感情の動きを描くことに立脚しているから。

イ 古典以来の日本文学の特徴は、無常という観念をいかに描き出すかということだから。

ウ 文学の中心的なテーマは、人間の死をどう捉えるかということだから。

エ 古典から現代に至るまで、文学作品では常に有限な人生に対する作家の感性が表現されているから。

オ 永遠の未来が約束されたら、人間は文学の主要なテーマとなる恋愛をすることがなくなってしまうから。

△語彙力を試す設問。日頃の学習や読書において意識的に言葉の知識を身に付けておくことが要求される。

△傍線部の内容説明を問う問題。第一段落と第二段落前半では「文学・文学者」と「数学・数学者」とが対比的に語られているが、その両者の関係や共通点を筆者がどのように捉え、表現しているかを読み取る。

△傍線部の理由説明を求める設問。筆者が「文学の本質」は「『人生が有限である』ことに在る」と考えるのはなぜか。傍線部に続く部分から「『人生が有限である』こと」がどのような意味で使われているかを考える。

問五

——線③「作者の科学者としての目がよく行き届いている」とあるが、これに対する筆者の考えを説明した次の文章の空欄[A]～[E]に入る最も適当なものを各群のA～Eからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

小説『武田信玄』中の台詞に表れた[A]に注目した評論家の評言は、その場の一兵卒の感慨から[B]を浮かび上がらせる工夫を見抜いた点で一定の評価はできるが、作家の[C]という、より重要な点を見落としてしまっている。すなわち、兵卒のこの感慨は[D]もので、その意味で[E]を表していると筆者は考えている。

A 関東平野の地質の特徴 イ「石」にこめられた兵卒の思い出

ウ 客観的な風景描写の方法 エ「石」の多寡についての考察

B ア 小説の舞台の移行に伴う時間的な経過 イ 兵卒の観察眼という人物の個性

ウ 小説の二つの舞台の地形的な差異 エ 日本の東西の地政学的な断層

C ア 甲州地方に対する郷愁 イ 芸術家としての永遠への志向

ウ 人生の寂寥に対するあこがれ エ 文学者としての感性

D ア 風土を愛する人間の普遍的な感情を表現する

ウ もうすぐ死ぬことへの不安を効果的に暗示する エ 妻子や父母想いであるという家族愛を象徴する

E ア 人間の死についての哲学的な分析

ウ 無限と有限の間を往復する作家の立ち位置 エ 日本文学に受け継がれる伝統的な無常観

問六

——線④「文学者が、『永遠なるもの』を混沌たる人生の内に見出そうとするのに対し、数学者はその外に見出そうとしている」の説明として最も適当なものを次のA～Eから一つ選び、記号で答えよ。

A 文学者が人間の死に目を向けることで、死によって終わることのない普遍性や永遠性への憧れを抱いて作品化するのに対し、数学者は永遠なるものを人間世界の外部である宇宙の法則の中に見出し、そうした宇宙の法則を客観的に明らかにする存在であるということ。

イ 文学者が混沌たる人間の日常の中で生きていくことの中から、全ての人間に通じる普遍的な法則を見出して作品に形象化するのに対し、数学者は俗事にとらわれず実社会から超脱した生き方をしていくことで、初めて深い精神の集中を得られ数学的な難問を解けるということ。

ウ 文学者は有限な人生ゆえに生じる苦しみや喜びに目を向けて作品を描くことで芸術的な真実に到達しようとするのに対し、数学者は逆に有限な人生にとらわれないことで、時間や空間を越えた普遍的な地点に存する深遠な真実をさぐるものだということ。

エ 文学者が人間社会の中に存する永遠なるものを発見し、それを有限な存在である人間のはかない人生と対照させながら描いていくのに対し、数学者は人間社会の外部に存する永遠なるものの存在を論理的に明らかにすること。

△傍線部の内容に対する筆者の考えを問う設問。第三段落の中盤以降で説明されている「武田信玄」という小説について、その一節（兵卒の言葉）の意味を「評論家」はどのようなものと受け止め、また筆者はその意見に対しどう感じたかを考え、そこから筆者の考える「文学」観を捉える。

△傍線部の内容説明を問う設問。筆者の考える「文学者」と「数学者」の本来あるべき姿、さらにはその両者の関係を本文から正しく読み取る。本文中に書かれた内容や筆者の考え以外の余計な解釈が加わった選択肢を見つけて外せるかがポイントとなる。

とを指しており、そのために有限な人生における内なる混沌を一度捨て去る必要があるということ。

オ 文学者がいずれば死んでいく人間の宿命を描くことで、個々の人間を超越した永遠の真理を描き出しているのに対し、数学者は混沌とした人間世界を見事に整理する理論や法則に目を向けることで、より直接的に人間がそのもとにある宿命を浮き彫りにできるということ。

問七 本文中の「X・Yに入る最も適当な語句を次の語群のA～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。」

X ア 法則 イ 情緒 ウ 芸術

エ 感受性 オ 真理

Y ア 発想の刷新 イ 方法の転換 ウ 思考の鍛錬

エ 論理と感性の融合 オ 本質の追究

問八 次のA～カは、本文の六つの段落の構成上の役割についてそれぞれ説明したものである。このうち、第二段落の説明に該当するものとして最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

A 本文で検討するある概念について、具体例を検討しつつ論じた段落

イ 本文で検討するある概念について、対比されるもう一方の概念と対比しながら論じた段落

ウ 本文で論じていく問題を実質的に提起している段落

エ 本文に「オチ」をつけ、全体を終わらせる段落

オ 本文で提示された問題に対する答えをまとめる段落

カ 本文で論じる二つの主要な概念について、筆者が日頃感じる実感を提示した段落

問九 次のA～オのうち、筆者が述べていることに合うものには1を、合わないものには2をつけよ。

A 文学と数学は目指すところは共通するが、そこに到達するための方法が異なる。

イ 「私」が文学と数学を両立できないのは、両者の差異ゆえに生じる「私」の無器用さのためである。

ウ あらゆる文学作品は寂寥をテーマとして描いている。

エ 「私」は父の作品に対する自分の解釈が、父を満足させるものだったと感じている。

オ 音楽は「私」が有限の文学と無限の数学との間を往還するのに不可欠である。

ア	ア	1	1	イ	1	ウ	2
エ	1	1	1	オ	2		

△空欄にあてはまる言葉我问う設問。前後に書かれた文章をよく読み文脈をつかんだうえで、最も適切にあてはまる言葉を選ぶ。Xは前にある「有限な人生に起因する」、Yは後にある「技術」と「質変換」という言葉がヒント。

△段落の構成上の役割を問う設問。第二段落について、粗筋(具体的な内容)だけではなく、その段落が文章全体においてどのような役割を果たしているかを把握する。前後の段落、特に直後の第三段落とどのような論理でつながっていくかを、後半にある文に注意して考えることが大切である。

△筆者の考えと合致するものを問う設問。各選択肢を、丁寧に本文と照らし合わせ、合致するかどうかを確かめる。